昇華した昆曲「夕鶴」

呉　艶

木下順二氏の「夕鶴」は中国の伝統演劇――昆曲に改作され、中国の有名な演出家夏淳先生の演出で、同志社大学教授向井芳樹先生の改編で、中国北方昆曲劇院により、一九九四年八月北京で上演された。木下順二氏のご指示によって、原作「夕鶴」と北方昆曲劇院の脚色した「夕鶴」を区別するために、後者を昆曲「夕鶴」と呼ぶ。昆曲「夕鶴」の公演後（約二年後）、「夕鶴」はまた上海昆劇院により改編され、一九九六年五月、東京で上演された。以下、昆劇「夕鶴」と称す。上海昆劇院の「夕鶴」を昆劇「夕鶴」と呼んで区別するのは、東京上演の時の表示に従う。昆劇と昆曲はここでは名前だけの違いで、同一概念である。「夕鶴」が昆曲化されたのは初めてであり、昆曲「夕鶴」の誕生は中国の伝統演劇界でセンセーションを巻き起こした。一九九五年十月、昆曲「夕鶴」は二年に一度の第四回中国演劇祭で数多くの賞を受賞し、高く評価された。昆曲は中国の古典劇の「元祖」とも呼ばれる最も古い伝統演劇で、悠久な歴史を持っている。今から四百年前に、明の時代から始まったものと見られているが、京劇など他の演劇の形式や発展に大きな影響を与えてきた。京劇が現れる前に、十八世紀の末、十九世紀の初期、北京で昆曲及び沢山の地方劇が流行していた。当時、昆曲を他の地方劇と区別するために、全種類の戯曲を「雅」類と「花」類の二つに分類され、「雅」はいわゆる典雅で、上品であり、「花」はいわゆる乱雑で下品のことである。昆曲以外の戯曲は全て「花」類に属するものであった。このように中国の伝統劇の歴史を見れば、昆曲は従来、中国伝統演劇の中で最も芸術的に洗練され、最高の格式を持つと言われ、味わい深い高雅な文化として、推賞されていることがわかる。京劇が生まれた後、昆曲の主導的地位は京劇にとって代わられたにもかかわらず、中国伝統演劇の「先輩」の地位はずっと変わ

りなく、保ち続けられてきた。京劇の誕生、発展も含めて、中国戯曲は昆曲から多くのものを吸収している。昆曲の演目の多くは歴史的、伝統的な題材である。外国の題材をこの最も古い演劇形式に移植するのは新しい試みであり、昆曲が活力を注がれたと言えるであろう。日本の民話劇はどのように中国の昆曲に作り直されたか、昆曲「夕鶴」と昆劇「夕鶴」を原作と比べながら、幾つかの場面の設定に対する分析を通して、ドラマの方法の共通性と相違点を見てみたいと思う。

一、ストーリーの展開の方法について

「夕鶴」の筋立ては洗練していて、ストーリーは巧みに構成されている。原作は惣どと運ずが共謀して、与ひょうを唆し、無理につうに最後にもう一回布を織ってもらう場面から、ストーリーを展開されている。鶴が命を助けられ、与ひょうの妻になるなどというそれまでの筋は主人公の独白か対話によって、観客に説明し、時間の順序に従わず、現在から過去へ溯って叙述する方法所謂「倒叙」の方法を使っている。

これに対して、昆曲「夕鶴」は時間の流れにしたがって、ストーリーを敷き広げる所謂「正叙」の方法を取り、原作の幕内のストーリーの展開をステージに具体化された。原作の一幕ものを開篇と序幕に加え、六幕ものに改作された。

「開篇」は元曲の楔子で始まり、女優の独唱でストーリーの筋を紹介する。楔子とは中国古典劇の序幕か第一幕の前におく小段である。

序幕では、鶴の群れが南へ飛んで、一羽が矢を負って、苦しんでいるところを与ひょうは助ける。

一幕では鶴は与ひょうに恋心を持ち、少女に変身し、与ひょうの家に来る。

二幕は二人の幸せな生活を中心に。つうは自分の愛を表すために、布を織ってあげる。

三幕では与ひょうは惣どと運ずに唆され、布を売り、欲が芽生え、つうにもう一枚織ってもらう。

四幕は惣どと運ずを中心に。与ひょうは罠にかかる。

五幕はつうと与ひょうの衝突する場面を中心に。つうは与ひょうに迫られ、最後にもう一回織ることを同意した。

六幕は与ひょうが約束を破って、つうは飛んでいく。

このような「正叙法」の設定は、昆曲の味いを出しながら、ストーリーの展開への観客の理解を助ける働きを果している。

昆劇「夕鶴」は原作と同じような倒叙法を使った一幕ものであり、ストーリーの展開は殆ど唄の中に盛り込まれている。しかし、倒叙

の形で複雑な筋を唄を通して観客側に分かりやすく伝えることは新劇ほど容易ではない。新劇にはセリフ劇としての便利さがあるという要素を無視してはいけない。ここからは、古典劇の特徴と新劇の要素、そしてこの両者の違いが見えてくる。昆曲は台詞としぐさを重視する点では新劇と同じであるが、それより昆曲は、唄、台詞、しぐさ、踊り、武術を総合した芸術で、これは中国古典劇の特徴でもある。ストーリーの展開は唄だけでなく、台詞、しぐさ、踊りなどで具体化されることによって、観客側により分かりやすく伝えられる。ここが中国古典劇とセリフ劇としての新劇の一番大きな違いであろう。この点で昆曲「夕鶴」は見事にこの昆曲芸術の豊かな表現力を利用したと言えるであろう。

二、「機織り」の設定について

「機織り」はこのストーリーの展開の重要な契機である。原作では布を織る経緯はつうの独白で観客に教えられている。つうの独白から、数回も織った布はすでに与ひょうに金に換えられたことが分かる。観客の前で敷き広げたのは、最後の一回をめぐっておきた衝突の場面である。

「機織り」をめぐって、つうの独白で観客に説明する原作に対して、昆劇「夕鶴」では、与ひょうの独白で説明するようになっている。

一方、昆曲「夕鶴」では、「機織り」はそれぞれ第二幕と第三幕と第五幕、三度と設定されている。

一度目に愛情を込めて織った。

二度目にやむえない気持ちで織った。

三度目に与ひょうの変心に心を痛めて織った。

この三度の機織りはじょじょに伏線を敷きながら、観客を劇のクライマックスに導く。この三度の機織りを通して、与ひょうの変わっていく姿がはっきり見えてくる。自然界をありのまま生きることで、純真な心を持つ与ひょうから、悪知恵に唆されて欲が芽生える与ひょうへ、更に罠にかかり、金欲に溺れた与ひょうへとだんだん変わっていくのに対して、観客はつうと同じ心理変化が起こる。これによって、つうの感情の変化も自然に観客にうまく伝わってくる。愛情に酔いしれる幸せなつうから、与ひょうが自分から離れていくことを恐れるつうへ、更に与ひょうに迫られ、身を削りながら、心を痛めるつうへと変わっていく。この設定によって、つうと与ひょうら三人との対立はより鮮明となり、ドラマの内容も劇的なものになったのである。見事に、発見と急転というドラマの基本的法則に適応している。ストーリーを逐一再現した昆曲「夕鶴」のこの展開の方法は原作の定型を越えた手法を全体に反映して、独自性を出し

た表現ができ、より効果的に人物づくりや主題を盛り上げることができたと言えるだろう。

三、子役の設定について

原作は子役の働きを強調した。開幕とともに、子供たちを登場させ、子供と与ひょうの会話によって、観客に与ひょうが心のやさしい人であることを教える。

与ひょうが子供と同じような純粋な心を持っている。

次に、惣どと運ずが与ひょうを金儲けの話へ釣りこもうとし、つうが心配しているところ、また子供たちが駆けてくる。

子供はつうといつも同じ世界にいる。子供と同じ童心を持つつうは俗世間のことが分からない。子役がそれを際立たせる。

子役の最後の登場は、つうが覗かれ、行ってしまった後である。子供たちは鶴を追って駆けて去る。これは開幕直後の登場と呼応し、つうの世界は子供の世界と通じ合うことを再び観客に教える。

このように原作では、子供たちの登場は糸のようにストーリーの展開を繋いでいる。子役は無視できない存在である。

一方、昆曲『夕鶴』では、子役の登場はその働きが更にはっきりとされている。

一幕では、鶴が人間に変身し、子供たちと出会う。つうが与ひょうの妻になり、子供たちが二人を囲んで、祝福する。

二幕では、与ひょうが布を売りに運ずについて行った後、つうは雪原に倒れ、子供たちに発見され、助けられる。

三幕では、つうが再び与ひょうのために布を織り、子供たちは「守銭奴」「馬鹿」と与平を責める。

五幕では、与ひょうがつうの織るところを覗こうとする矛盾した心理状態でいる時、幕内で、子供たちの合唱「見るな、見るな」が聞こえる。

美しく豊かな詩情をみごとに舞台化され、子供たちに託して、つうの純粋な世界を描いている。子供たちは童心でつうを助けたり、慰めたり、与ひょうを注意したり、目覚めさせたりして、二人の幸せを守ろうとする。

一方、昆劇「夕鶴」は子役が設定されていない。与ひょうは正直な農民として描かれている。子役の伏線が無くなり、前半の鶴を救った気のやさしい与ひょうが後半の金儲けに目が眩んだ与ひょうとは、同一人物とは思えないほど、前後が結びつかないような感じがする。原作の子役の設定は二つの意味があると思う。一つはつうの憧れた人間の世界に、純潔で貪欲に染まらない、つうと心が通う存在を設定するためである。それは無邪気な子供しかない。もう一つは与ひょうが子供のような天真純朴な心を持つ一面を強調するため

の設定である。つうはその「純朴」に引き付けられ、愛情を捧げる。また、与ひょうがその「天真」のため、騙され、つうを傷つけ、破局の原因となる。与ひょうの単純さを際立たせるのも無邪気な子役しかできない。この二つの意味を持つ子役の設定は、いずれも二人の主人公と子供と照り映えるようにさせ、主人公の性格の特徴をはっきりさせ、主題を深化させるためである。昆曲「夕鶴」は原作に比べて、筋だてはほとんど変わっていないが、役の設定は極めてドラマチックである。子役にしても、その喜怒哀楽がストーリーの展開と起伏に関連を持ち、他の役がとって変わることのできない役割を果たしている。伝承の世界にひそむ素朴、清純な美しさが子役の登場によって、みごとに舞台に再現された。

この点で、昆曲『夕鶴』は原作のすぐれたところを受け継ぎ、更に役の新しい可能性を開拓し、それぞれの重要な役割を充分発揮させたといえるであろう。

四、「覗き」の設定について

この劇のクライマックスである「覗き」の場面は原作では、「与ひょうは惣どと運ずの好奇心からの「覗き」を止めることができなく、機屋に鶴が織っていると教えられ、ついに覗いてしまう。中にいる鶴がつうであることを信じなく、うろうろと探しつつ家の外へ出て行ってしまう」ようになっている。昆曲『夕鶴』も原作と同じ場面を設定している。惣どと運ずの設定は一般の脇役の設定とは違って、ただ金に執着心が強い二人の普通の農民として描いているだけでなく、つうの純粋な世界と対照となっている功利的俗世間の利己主義の代表として描かれている。与ひょうはこの利己主義に影響され、欲心に支配され、つうを傷つけ、つうの世界から離れていってしまう。惣どと運ずの覗きを破局の発端とされ、約束を破った与ひょうの「覗き」で破局が決まるが、破局の原因ではない。「金欲」が二人の間に亀裂を生じさせていき、最後に二人を引き離す。金欲と愛との矛盾――このテーマは「覗き」の場面によって、引き出される。だから、惣どと運ずのここでの登場は、このテーマを引き立たせる大変重要な役割を果たしている。また、昆曲「夕鶴」では、与ひょうが中を覗く瞬間、機を織っている鶴をつうのことと思わず、つうを探すという設定は合理的で、与ひょうにとって、鶴のことを全然妻の化身とは考えられないのはいかにも自然である。

一方、昆劇「夕鶴」では、惣どと運ずはここで登場していない。つうが機屋で力が尽き果て、がっくりと倒れる。与ひょうは音を聞いて、妻への心配から戸を破り、中に入り、破局が決まる。そこで、また与ひょうが妻の正体が分かり、すぐこの事実を受入れるというような設定となっている。原作の主題を考えたら、破局が決まるこ

この覗きの設定は鮮明だとは言えない。「覗き」の設定において、ここで、惣どと運ずの存在の無視されたことによって、原作の主題は弱められたと思う。また、劇全体の流れから見たら、与ひょうがすぐに鶴のことを妻の化身だと認めるのもちょっと観客に唐突な感じをさせると思う。

昆劇「夕鶴」の東京公演の時、同時に上演したのはもう一つ昆曲の伝統演目の「千里送京娘」（千里のみち）がある。観客と評論家の反応からみれば、昆劇「夕鶴」より、「千里送京娘」のほうに興味を示されているようである。評論家の大場氏と小澤氏は対談の中で、昆劇「夕鶴」について、次のように語っている。①

大場　ぼくは二つのうち、前のほうの「千里のみち」のほうが面白かった。……昆劇とはこういうものなんだなということが漠然と分かった。……それに対して「夕鶴」のほうは、木下さんの「夕鶴」とはぜんぜんちがっているということを、改めて思いました。……

小澤　……やっぱり感性が相当違う。最初あるショックを受けました。……

以上分析した昆劇「夕鶴」の幾つかの場面の設定から見ると、観客が違和感を感じたのもおかしくない。これに対して、遺憾だと言わずにはいられない。

五、昆曲「夕鶴」の再創作

「改編」とは原作に忠実でありながらの再創作で、昆曲「夕鶴」は原作を元に昆曲の真髄を生かしながら、原作にない設定を効果的に用いて、主題を表現した。

まず第一幕の与ひょうとつうの出会いの設定。鶴は与ひょうと子供たちに名前をつけてもらい、与ひょうと結ばれる。

第二幕の与ひょうとつうの幸せな結婚生活の場面の設定。歌舞で愛し合う二人の喜びを観客に伝える。つうは愛を込めて織った一枚目の羽衣を与ひょうに贈る。原作の布は昆曲「夕鶴」では羽衣に変え、美しい羽衣を着た与ひょうがつうと真っ白な雪原で遊び戯れる場面は、昆曲の歌いつつ踊るという特色をより効果的に際立たせ、主題を深化した。

第二幕の羽衣を売った与ひょうの最初の動機の設定はもう一つ原作にない意味深い再創作である。原作では、与ひょうが布を売った最初の動機について触れてはいないが、与ひょうとつうとの衝突の糸である与ひょうの金欲が始終一貫のものとされている。昆曲では、最初の動機は惣どと運ずの「彼女にいいものを買ってやろう」との一言によるものだと、つまり与ひょうのつうへの愛から生まれたものとされている。

この愛から生まれた最初の動機は三十両の金が手に入った時点から変わっていく。与ひょうは正直な農民として描かれるだけでなく、つうとお互いに愛し合うこの愛情のドラマの主人公として、描かれている。最初から金のために、二人の愛のシンボルである羽衣を売るのでなく、「愚かな」ため、一時的に騙されたという合理性に合う。その後の展開のために伏線を敷き、与ひょうの性格にふさわしく、前後が一致するような展開である。

第三幕で与ひょうが羽衣を売り、嬉しくてものを買って帰って来る。ここが原作にはない設定であるが、与ひょうの単純な性格と欲望に負ける人間の弱さを際立たせる。与ひょうは羽衣で換えた金で、真珠の首飾りを買ってき、つうにつけてあげようとしたが、つうは首飾りのことが全然分からず、自分を縛る錠と誤解し、怖がる。与ひょうの説明を聞いて、与ひょうを喜ばせるためにつけた。ここも原作にはない設定である。木下順二氏はつうを人間のように描きながら、異類の素性を忘れず、数箇所で鶴の異類としての特徴を際立たせ、つうの世界と俗世間の違いを強調した。例えば、惣どと運ずの前で、つうは「鳥のように首を傾げていぶかしげに二人を見守る」とかいうような描写はいかにも自然である。一方、昆曲「夕鶴」において、さっき取り上げた「首飾り」の設定は異類の素性を描写する点で独特な工夫を凝らしていると言えるだろう。

以上の幾つかの設定はいずれも愛のテーマを強調するための画龍点睛の働きをしていると思う。

ここでもう一度木下順二氏の創作意図と原作の主題を顧みたいと思う。木下順二氏が「夕鶴」上演一〇〇〇回に際して書いた「夕鶴の記憶」（一九八四年）によれば、その執筆依頼について、こう語っている。「なにしようか、そうだ、やっぱり『鶴女房』を書き直すことにしようと決めるまでに……十日あまりかかった」「それが単なる報恩譚であるという点であった。矢を抜いて救ってくれた。だから恩返しに女房に来た。しかし覗かれた。だから飛んでいってしまった。――そういう古くさい話だけではないはずだろう、この話は」と。[2] 作者が書き直しに当たって考えていた要点は、原話が「単なる報恩譚である」点で、そうはしたくないということだった。原話の報恩譚を愛情のドラマに再創作したのである。「夕鶴」と原話の「鶴女房」との根本の違いは原話の恩返しのモチーフからの離脱だと従来考えられている。この点で昆曲「夕鶴」は見事に原作の主題を摑み、「夕鶴」の奥深い内包を引き出し、原作を越えた新しい感動をよぶものとして、成り立ったと言えるだろう。

中国古典劇は演技、舞踊、音楽、文学などあらゆる分野の芸術を溶け合わせた総合芸術であり、聴覚的、視覚的、時間的、空間的な芸術とも言われる。こうした渾然たる全面的俳優術の中で、特に歌

唱が重視される。昆曲「夕鶴」は中国古典劇の歌いつつ踊るという特徴を十分に作用された。独唱やデュエットや幕内の合唱などを通して、ストーリーの展開と登場人物の性格と心理変化を現す。日本人の繊細な感情表現を昆曲の様式を踏まえながら、昆曲と日本の民話劇がうまく調和を取るように模索をくり返されたところが見られる。

最後に昆曲「夕鶴」の意義を考えてみたいと思う。木下順二氏は塩田庄兵衛氏との対談の中で、何故民話を書き出したのかという質問について、こう答えた。「私が大学を出たのが一九三九年ですが、その前後から、それまで英国演劇史をやろうと思っていたんですけれども、世の中が非常に険悪になってきて、そういう演劇史的なことでいろいろ細いことをほじくってやるよりも、同じドラマならば、直接現代に訴えかける劇作ということをしてみようというふうに考え出して、劇作を勉強したわけです、戦争中に。……（鶴女房）この単調な話を最初そのまま芝居に書いたけれど、戦後それらを発表する機会がきた時に、どうしてもこれでは不満だったんで、この話には現代が抜けている」と。[③]「夕鶴」に現された時代精神、時代の性格がこの作品の素朴な民話から現代劇に作り上げられた成功なところである。一方、原作のテーマは戦後の日本に適応し、高度な経済成長をする現在の中国にも適応する。拝金主義への視点が鋭い風刺となって、観客に心に響いてくるような思いをさせるだろう。昆曲は従来高雅な芸術として、歌詞が難しく、難解のイメージがある。それは昆曲に使われているいろんな型とか、唄や、踊りは歴史の長いものがほとんどだからである。その時代の文脈が一般の観客、特に若い観客にとって理解しにくい。昆曲「夕鶴」の場合は構成が簡潔で、筆致が相当緻密でありながら、歌詞が平易で、分かりやすい。伝統演劇の真髄の表現形式を取り出した上で、進めて伝統的な様式の呪縛を破っている。そして極めて雅で繊細な昆曲の持味で脚色されたところが一般大衆の心を打ち、共鳴させる。昆曲「夕鶴」の誕生は昆曲の演目に改革を加え、昆曲に大衆性と現実性を与える成功した一例として、その成功は評論家の鐘芸兵氏が言ったように、「……この六幕ものは一気呵成し、その気勢が首尾一貫している。日本の作品の風格を保ちながら、昆曲の味わいも失っていない。……これらは夏淳先生の演出と向井芳樹先生の改編の功である」。[④]昇華した昆曲「夕鶴」は、昆曲の歴史に大きな跡を残すだろう。

注

① 「木下順二論」宮本泰治――岩波書店
② 『悲劇・喜劇』一九九六、七
③ 「夕鶴」木下順二――新潮社
④ 「文芸報」中国、一九九四、十、十五

参考文献

昆曲「夕鶴」――『新綴白裘』北昆専集　主編　王蘊明　从兆桓　華齢出版社
昆劇「夕鶴」――東京上演プログラム
北京日報、一九九四、五、二〇
「木下順二の民話劇についての序説」向井芳樹　帝塚山学院大学研究論集　第三輯
昭和四十三年十二月一日発行
『京劇劇目辞典』――中国戯劇出版社　曾白融　主編